

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

社会科学における豊饒の海

菅原 晴之

経済学・経営学等を大学入学直後に学ぶにあたって新入生が活用する、入門的な授業、そのための教科書はわかりやすく、体系的に構成されて無駄が少ない。このような授業および教科書と格闘してその内容を理解すれば、入り口からさらに進み、大学院向けの上級教科書やビジネススクールで使用される参考文献を容易にクリアして、効率よく学習できる。社会科学における古典の文章は、現代の教科書の中ではまれにその一部が引用されるに過ぎない。経済学説史という分野では、過去の学者の業績が紹介されているものの、その表現方法は現代の理論、政策に合わせて再構築されている。なお、その中の一部の学者名とその学説は高校の政治経済、世界史、倫理社会、現代社会等の教科書に紹介されているものの、断片的な記述に過ぎず、高校の教科書や大学の入門書を通読しても古典的な文献を直接読んだあとの印象とはかけ離れている。

現代でも読み継がれる古典を執筆した著者は、時代の先を読むことができた天才であり、現代の教科書よりも幅広い分野に精通した学際的な研究者であった。J.M.ケインズは『確率論』の著者でもあり、その特色は確率論が数学の一分野というよりも論理学の派生分野であるという方法論を復活させ、その学説はブルームズベリー・グループで交流があったB.ラッセルから支持され、絶賛された。ラッセルは哲学者ヴィトゲンシュタインの恩師であり、『論理哲学論考』のなかで数学基礎論の一分野として再構築した記号論理学を活用した注釈を付け加えている。なお、ヴィトゲンシュタインはイタリアの経済学者ピエロ・スラッファと交流がある。

J.M.ケインズと同じ1883年に生まれたシュムペーターも、日本語版文庫に相当数収録されている。高校の教科書等に掲載されている簡単な記述では計り知れないほど博覧強記の人物であり、経済学説史の研究者としても著名であったが、その研究範囲は歴史学、

社会学、哲学、文学等にも深く及び、『源氏物語』(英語版)も読んでいた。しかし、この天才的研究者でも理論経済学の著書の中で、ある数学の定理の展開に誤りがあり、戦前期にその定理の証明を修正した上、その社会科学的な曖昧さも指摘したのは翻訳者の一人である安井琢磨先生である。そのため、日本語翻訳版の方が論理的に明快である。また、景気循環理論においては複数の理論を統合しようとして世紀の大失敗に陥ったものの、技術革新(発展、新結合)という重要な問題提起を発信してその後の経済学に重要な貢献を果たした。例えば、ノーベル経済学賞を受賞したサムエルソン、ソロー、スティグリッツ、アカロフ、P. ローマー等多くの経済学者に多大な影響を与えた。彼らの成果の一部は、学部、ビジネススクールのテキストにも反映されている。

しかし、現代の最先端研究に表れるシュムペーターは、制度・歴史とその隣接分野を捨象している。ただし、最先端研究に挑戦している研究者が理論・統計学のみ狭隘な分野に興味を集中しているのではない。リー群論の定理を活用して技術進歩と経済不変性の法則を立証した数理経済学者は、論文の冒頭で荀子の一節を引用している。現代においても、新自由主義者のトップランナーであったハイエクもシュムペーター以上に幅広い分野に精通し、経済学の分野に限っても学説の論争の余地はあっても、理論展開において重大な失敗はないといわれる。さて、21世紀になってから自由主義、民主主義、平等主義は、全体主義、人種差別主義、市場の独占から重大な挑戦を受けて後退しているようにも見える。現代の危機的な問題を解決するためには、豊穡な海の古典の中に忘れ去られた手がかりを再発見することが必要である。革新的な最新の理論さえ、その多くは古典的学説を最新のツールで装ったものである。

(所員/すがわら・はるゆき)

2020 年度国際経営研究所の活動について

■ 2020 年度研究所所員の構成数(4/1 現在)

所員(専任) 44名
 特任教員 8名
 客員研究員 14名
 常任委員 4名

照屋 行雄(～2020/3/31 経営学部教授)
 2020年4月1日～2022年3月31日(2年間)
 <更新>
 高柿 健(城西大学経営学部准教授)
 2020年4月1日～2022年3月31日(2年間)

<2020 年度新任の先生 4 名のご紹介>

- ◇ 大崎 孝徳 教授(マーケティング)
- ◇ 尻無濱 芳崇 准教授(管理会計、マネジメント・コントロール、非営利組織会計)
- ◇ 徐 寧教 准教授(国際経営、生産管理)
- ◇ 中見 真也 准教授
(マーケティング戦略論、流通論、消費者行動論、地域再生化、健康経営)

■ 2020 年度研究所常任委員業務

所長 石積勝
 常任委員(4名)(ゴシックは再任)
 飯塚重善
 <みなとみらい移転担当、地域連携事業担当>
 小島大徳
 <みなとみらい移転担当、出版担当>
 阿部克彦 <研究事業担当>(講演会など)
 山崎友彰 <広報担当>(国経研だより/HP)

■ 研究活動(共同研究プロジェクト/新規 3 件)

- ◇ 大学生を対象とした日常生活における身体活動量および生活習慣について

代表者: 後藤 篤志

- ◇ 経営学部新プログラム「国際ビジネス・コミュニケーション(IBC)プログラム」の教育効果分析と改善

代表者: 白石万紀子

- ◇ AI を利用した新聞記事分析による価値観推移数量化システムの開発

代表者: 道用 大介

客員研究員(50 音順)

<新規>
 亀山 修一(ムラカワ株式会社 顧問)
 2020年4月1日～2023年3月31日(3年間)

■ 出版活動

◇ 国際経営フォーラムの刊行

『国際経営フォーラム』NO.31
 特集テーマ:『アフター・コロナ』
 申込締切:6月30日、原稿締切:9月30日
 ※2年目の共同研究プロジェクトについては中間報告書の提出をお願いします。

◇ Project Paper(共同研究成果報告書)の刊行

今年度は3件予定しています。

◇ 国経研だより発行(7月、11月、2月)

今年度は4月の発行を見送りました。

■ 公開講演会開催

コロナ禍においてオンライン講演会含め実施するか検討中です。何かプランがございましたら国際経営研究所までご相談下さい。

■ 広報活動

- ◇ アクティビティを国際経営研究所HPで発信
<http://iibm.kanagawa-u.ac.jp/>
- ◇ 「国経研だより」で組織内外PR

■ 地域連携 平塚市との協働事業を推進

平塚市産業活性化セミナー後援
 (今年度は開催未定)

🌸 国際経営研究所からのお願い 🌸

2021年度みなとみらいキャンパスへの移転に伴い、スペースの問題もあり研究所の書籍の廃棄を行います。要保存とされるものについて、ご確認にお越しく下さい。

また移転に関するご質問、ご意見等ございましたらみなとみらい移転担当の飯塚先生、小島先生もしくは国経研までご連絡下さい。

フィリピンの大学

大崎 孝徳

みなさんはフィリピンに対して、どのようなイメージをお持ちでしょうか？

一昔前までは、治安が悪いといったイメージが強かったかもしれないが、現在では、セブ、ボラカイ、エルニドなどを中心としたビーチリゾート、また英語が公用語の1つとなっていることから、米国や英国よりも安く英語を学べる国として、多くの留学生を集めている。本稿では、こうしたフィリピンの大学事情に関して、筆者が在籍していたデ・ラ・サール大学を中心に述べていく。

フィリピンの大学進学率

フィリピンにおける大学進学率は35%程度であり、50%を超える日本と比較すれば低い。その主たる理由の1つにはもちろん経済的な事情がある。しかし、例えば、タクシーやGrab（東南アジアを中心に普及している配車サービス、平たく言えば“白タク”）に乗ると、ドライバーの「自分は子供（もしくは兄弟）を大学に進学させるために田舎から出てきて、こうして働いている。あと、2〜3年したら田舎に戻る。」といった話をよく耳にする。つまり、経済事情が苦しくても「何とか子供や兄弟を大学に通わせたい」と多くの方が思っているということである。こうした話を聞いたたびに、自らの仕事の責任の重さを痛感させられた。

フィリピンの大学システム

一般的な大学のシステムは1年間を前・後期に分かれたセメスター制であり、4年かけて学士取得となる。このように書くと日本と似ているように思われるだろうが、その内容は大きく異なる。日本における1科目の講義時間は90分×15週が平均的であるが、フィリピンでは90分×週2回×15週となっている。ちなみに、デ・ラ・サール大学は1年間に3学期に分けたトライメスター制となっている。このトライメスター制は普通の制度とは異なっており、長期休暇を大幅に削減することにより、90分×週2回×15週を1年間に3度行う内容となっている。結果、デ・ラ・サール大学は3年間で学士の取

得が可能となっている。

今、思い起こしても、赴任当初の講義準備は筆者にとっては恐ろしく過酷なものであった。自らの英語力を考慮すると、日本と同じ内容でも2〜3倍ほどは講義準備に労力を要するだろうと覚悟していたものの、赴任後、日本の2倍のスピードで、2倍のボリュームを行わなければならないと知った際は卒倒しそうであった。もっとも、初めての学期の終盤には既にすっかり慣れており、自分でも驚いた記憶が残っている。

デ・ラ・サール大学での講義

デ・ラ・サール大学における各講義の履修者数は最大でも45名程度に制限されている。これは高い教育効果を狙ったことである。確かにこうしたスケールだと一人一人の学生の顔を確認しながら進行でき、教える筆者、教わる学生ともども満足度の高い講義になると実感した。さらに、フィリピンの若者は積極的に発言する傾向が高く、講義は大変楽しいものであった。

逆に、人の話を落ち着いて聞くことは苦手という傾向も見られた。もっとも、こうしたことは学生に限らず、フィリピンの国民性かもしれない。

フィリピンにおいては名声の高い私立大学であるデ・ラ・サール大学には多くの富裕層の子弟が集まる。例えば、PCでも学生はMac、教員はエイサーやレノボなどが目立ち、「教員と学生の格差が問題だ！」と笑いながら嘆いている先生も多かった。

また、フィリピン最大の財閥であるSMグループ

族の子弟が学ぶ大学としても有名であり、フィリピンで最も素晴らしいと評される大学図書館はSMグループ創業者ヘンリー・シー氏の寄付によるものである。

みなさんは図書館の表面を覆うデザインが何を現しているか？おわかりだろうか(写真参照)。筆者はフィリピンの海の細波では？と推測していたが、なんとヘンリー・シー氏の指紋とのこと。多くの日本人は興ざめするかもしれないが、まさに文化の違いということだろう。

ともかく、フィリピンはよいところですよ。未だ訪れたことがない方は是非！

(所員／おおさき・たかのり)

研究余滴



日本語教育の多様性

佐藤 梓

日本語教育と聞いて、それが何を指すか見当がつかないという人は少なくなってきたが、その対象や目的、内容を具体的に想像できる人はまだそれほど多くないだろう。ここ数年は、日本国内における日本語教育の重要性や課題が社会的にも表面化し、さまざまな議論や検討がなされ、法整備もされ始めた。2020年6月23日に政府において策定された「日本語教育の推進に関する施策を総合的かつ効果的に推進するための基本的な方針」では、日本国内に限らず、海外における日本語教育の充実についても言及されている。日本語教育と言ってもその対象は広く、学習者や学習目的も多様である。

私は、2019年9月から神奈川大学経営学部の所属となり、主に湘南ひらつかキャンパス全体の留学生や非日本語母語話者の学生への日本語サポートを行っている。これには、大学生活での学修や検定試験などのためのサポートから、研究室や課外活動の場において良好な人間関係を保つために必要な日本語力や大学卒業後を見据えた日本語力の向上など、その対象とする「日本語」は多様である。サポートと聞くと、「できないことへの支援」と捉えられることが多いが、学生各々が必要とする日本語に関する知識や日本語運用力を支えることがその目的である。また、日本語サポートそのものを広く捉えた場合には、在籍生であれば誰でも利用可能な施設や提供される各種サービスにアクセスできるようにすることや学生として受け取るべき情報をほかの学生と同様に得ることができるようにすることもその一つである。これは、日本国内で暮らす外国人（ここでは日本語力にサポートが必要な外国人を指す）が、社会の中で情報弱者にならないために方策が必要であることと同様のことである。その取り組みや考え方として「やさしい日本語」というものがある。すでにメディアなどでも取り上げられているので見聞きしたことがあるかもしれない。これらの取り組みで意識されるのは、当然ながら、その情報を受け取る側である。日本語で出される情報に、ただ読み仮名を付けてもその内容を理解することは難しい。また、英語などの翻訳をつければ良いということでもない。

日本語を母語としない外国人の中には、漢字がその理解を助ける人がいる一方で、ごく簡単な漢字とひらがなで書いてあるほうが理解できる人もいる。より重要なことは、表記ではなく表現を分かりやすくすることであり、そのための取り組みが進められている。

ここまで国内の日本語教育に関連するごく一部を紹介してきたが、日本語教育の多様性という意味で、自身の研究分野である外国語学習環境における日本語教育についても少し触れておきたい。私は本学スペイン語学科の卒業で、在学中に日本語教員養成課程を副専攻で履修した。卒業後は、メキシコ北東部ヌエボレオン州にある大学や高校で日本語を教える仕事を果たした。その地では、日本語は大学での自由選択科目として設定されており、卒業単位などには含まれない科目であった。それにも関わらず、週3～5回の授業があり、みな非常に積極的に授業に参加していた。世界には大学の専攻・副専攻で日本語を学ぶ学生がいる一方、多くの地域では卒業単位などには含まれないが大学等で学ぶ学習者も多くいる。

社会的に日本語が必要とされない地域において、なぜ熱心に日本語を学ぶのかに興味を持ち、その原動力を明らかにすることが私の研究テーマとなった。海外の日本語学習者の学習のきっかけの多くがアニメや漫画などのポップカルチャーであることはよく知られているが、それはあくまでもきっかけであり、学習を続ける動機とは必ずしも一致しない。学習動機づけの観点からの日本語学習者については、また次の機会に紹介したい。

(所員/さとう・あずさ)

編集後記

第65号をお届けします。

今号では、菅原先生と大崎先生、佐藤先生に執筆頂きました。

日頃の教育・研究内容を紹介頂いています。

現在、オンライン授業の準備等の対応でお忙しい中お時間を割いて頂き、誠にありがとうございました。

今後ともよろしくお願ひいたします。(Y)